

明治中期日本における医療情報の受容 ——『順天堂医事研究会報告』における集団的評価——

月澤美代子

順天堂大学／明治大学／M-医学史・科学史研究室

1. 問題の所在

幕末維新期、海外から舶載された書籍あるいは在留欧米人のもたらす情報によって日本に近代医学が伝えられた。明治期に入り、新政府に雇用された外国人医師さらには海外に派遣された東京大学医学部卒業生たちによって最新のドイツ医学が紹介された。しかし、日本各地で開業していた臨床医たちは海外から紹介された医療情報を無批判的に受容したわけではない。論者は既に発表した論文で、新しく導入された外科器具である電気焼灼器とイクラセウルに対する佐藤進による実践的な技術評価を紹介しているが、ここでは明治中期日本における医療情報の伝達・普及に焦点をあてて、新しく導入された薬剤に対する集団的な臨床実践の蓄積と技術評価を検討してみたい。

2. 『順天堂医事研究会報告』誌に掲載された臨床実践報告

明治期には多数の医療情報誌が刊行されたが、その掲載内容は一様ではなく、明治初期刊行のものには欧米の医療情報誌に掲載された記事の翻訳・紹介が多くを占めている。一方、明治中期に刊行された医療情報誌には日本国内の医療施設における日本人医療者自身による臨床実践報告が掲載されるようになる。

『順天堂医事研究会報告』は1887(明治20)年1月15日に第1号が出版され、1894(明治27)年1月15日刊行の第169号から『順天堂医事研究会雑誌』と誌名を変更し、2018年の現在までさらに誌名を変更しながら継続して刊行されている。刊行の経緯については『順天堂史 上巻』(学校法人・順天堂編集、1980年)に詳しく記載されているが、江戸末期の医学塾に起源をもつ東京・本郷の私立順天堂医院で学ぶ医師たちの私的な勉強会から開始され、順天堂医事研究会へと発展した。順天堂医事研究会の会員には、特別会員、通常会員、遠隔会員の区別があり、特別会員は東京府下の開業医、通常会員は順天堂に通学して修業している門生、遠隔会員は地方に開業する者とされていた。なお、会費は、特別会員、通常会員は毎月20銭、遠隔会員は15銭で、毎月2回刊行される『順天堂医事研究会報告』誌を受け取ることができた。

医療情報の伝達・普及の面から見て『順天堂医事研究会報告』が重要なのは、遠隔会員たちも自らの実践の成果を発表する投稿権をもっていたことである。さらに、この雑誌は会員以外の一般の購読者にも1冊7銭5厘という安価な価格で頒布されており、購読者は日本各地に拡がっていた。

3. コカイン局所麻酔の臨床実践

具体的な事例としてコカイン局所麻酔の臨床実践を示しておきたい。順天堂医事研究会の会長であった佐藤進の「コカイン将ニ格魯兒保兒母(クロロホルム：引用者注)ニ代ラントス」と題した講演を受けて集団的な検討は開始されている。佐藤進は、局所麻酔薬としてのコカインの効用を称揚するスタンスを明示していたが、「新奇ノ説」に対して「其説ノ利害得失ヲ明ラカニセシテ妄リニ他人ノ説ヲ信」じる態度を戒めており、これに応じて日本各地の遠隔会員からの「中毒症状」を含むコカイン麻酔の臨床実践報告が寄せられた。コカイン局所麻酔による中毒症状に関する情報は1880年代後半の欧米の医療界における重要な話題であり、多数の臨床実践報告が医療情報誌上に飛び交っていた。しかし、ほぼ同時期に、日本でも国内各地の臨床医たちの日本語による臨床実践報告が『順天堂医事研究会報告』誌を舞台に行き交い集団的な評価が模索されていた。